

ミャンマー中央部の中部中新統-下部更新統より産出したスッポン類化石とその古生物地理学的意義

The trionychian turtles from the Middle Miocene to Lower Pleistocene in Myanmar and its paleobiogeographic implications

藪田 哲平^{1*}, 平山 廉², 高井 正成³, タウンタイ⁴, ジンマウンマウンテイン⁵, 安藤 寿男¹

SONODA, Tepei^{1*}, HIRAYAMA, Ren², TAKAI, Masanaru³, Thaug-Htike⁴, Zin-Maung-Maung-Thein⁵, ANDO, Hisao¹

¹ 茨城大学, ² 早稲田大学, ³ 京都大学, ⁴ シュエボ大学, ⁵ マンダレー大学

¹Ibaraki University, ²Waseda University, ³Kyoto University, ⁴Shwebo University, ⁵Mandale University

ミャンマー中央部には、中期中新世末-前期更新世の河川成層であるイラワジ層群 (Irrawaddy Group) が広域的に分布しており、哺乳類など多くの陸生脊椎動物化石を産出する。カメ類に関しては、現在のアジアには分布しない曲頸類 (*Shweboemys pilgrimii*) の頭骨の産出報告がなされているのみであった。今回、新たにスッポン科のほぼ完全な背甲、ならびにスッポンモドキ科の縁板3点が、グウェビン地域およびマグウェ地域から発見されたので、ここに報告する。

スッポン科の背甲は、前後長および左右幅ともに60cmに達し、背甲後方にあった軟骨部分を含めると、生息時の背甲長は約90cmであったと推定される。鱗板溝や縁板、尾板、上尾板を欠き、背面に虫食い状の彫刻が顕著に発達するという潜頸類スッポン科に固有の派生形質を有する。頸板は、直線的な前縁を呈し、左右に著しく伸長する。その遠位部は外側後方へ屈曲し、第1肋板の遠位部に近接する。第1椎板は前後に伸長した六角形を呈するが、その前縁は前方へ強く湾曲する。第1・2肋板の腹側近位部には顕著なリッジが発達する。第1-3胸腰椎の椎体腹側面は平坦で、4番目以降の椎体のようにリッジは発達しない。これらの特徴はコガシラスッポン *Chitra* 属に共通して見られ、特にタイやマレーシアに分布する現生種の *Chitra chitra* に最も類似する。しかし本標本では、第2肋板の遠位端が顕著に蛇行することや、第8肋板に退縮傾向が見られず、よく発達していることが独特の形態として認められる。

スッポンモドキ科は左第1・2縁板および右第9縁板の3点が確認されている。縁板表面には、スッポンモドキ科特有の細かな結節の集合からなる表面彫刻が発達し、鱗板溝は認められない。最大甲長は約70cmと推測される。本科は、白亜紀アルビアン期の日本などアジアで出現し、古第三紀には欧州や北米にまで分布を拡大した。しかし、新第三紀以降における本科の化石記録は非常に乏しく、ドイツとザイールの中新統において縁板が1点ずつ報告されているのみである。したがって今回の発見は、アジアの新第三系において初めての化石記録となる。

今回報告する標本のうち、スッポンモドキ科の左第2縁板を除く資料が、グウェビン地域のイラワジ堆積物から産出しており、その時代は哺乳類化石相の分析から後期鮮新世と見積もられている。これらのことから後期鮮新世において、スッポンモドキ科が現在の分布域であるニューギニアとオーストラリアだけではなく、東南アジア (少なくともミャンマー) にも分布しており、おそらく更新世になって現在の分布域を除く地域で絶滅したことが明らかとなった。また、ミャンマーの鮮新世カメ類相には、スッポンモドキ科や *Shweboemys pilgrimii* のように、より古い時代からの生き残りと思われるタクサが含まれており、本地域の古生物地理や古気候を明らかにする上で貴重な資料になると考えられる。

キーワード: ミャンマー, 新生代, イラワジ層群, 化石カメ類, スッポン類

Keywords: Myanmar, Cenozoic, Irrawaddy Group, Fossil turtles, Trionychia